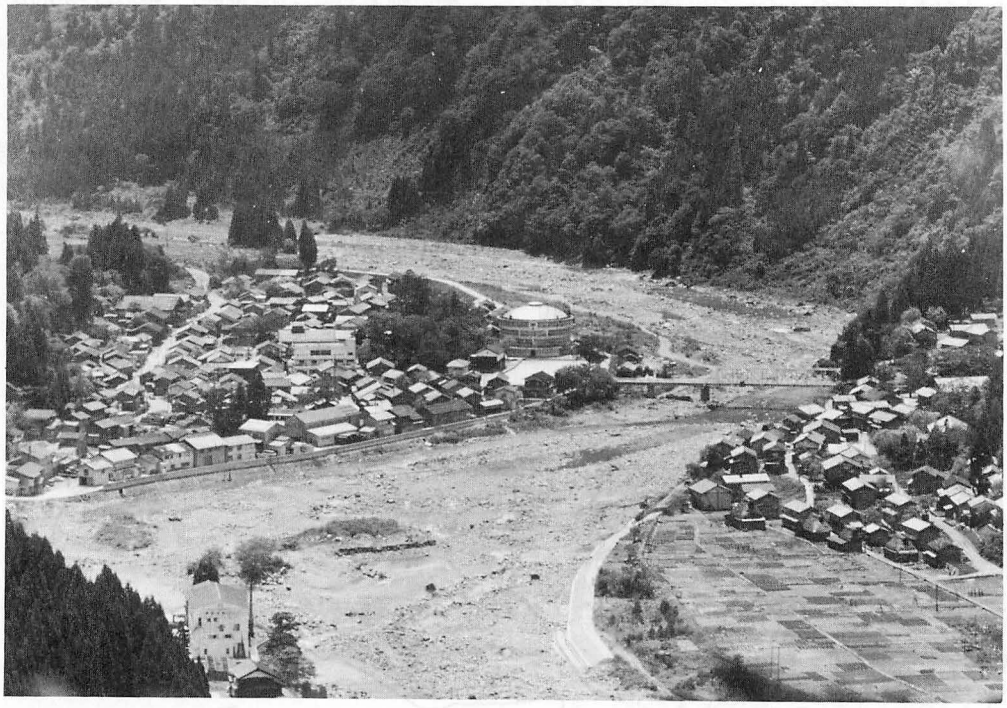
ISSN 0388－4732

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

特集　山村の生活文化

第12巻 第1号



水没前の桑島

千数百年の歴史と文化の伝統を誇った白峰村桑島地区は，手取川ダム湖の湛水（昭和54年6月1日開始）に伴い，同年末には湖底に水没した。水没前には224世帯（約1,300人）あった桑島地区住民のうち，60世帯が旧集落（写真）より約2km上流の代替地に，57世帯が鶴来町桑島町へ，残り107世帯が金沢市，野々市町，および桑島町以外の鶴来町内などへ，それぞれ移転した。

旧桑島地区は，手取川を挟んで東島（写真左側）と西島（同右側）に分かれていた。金沢方面と白峰，勝山を結ぶ国道157号線は，かつては東島を通っており，西島はトンネルにより赤谷川流域の出作り地帯と結ばれていた。両集落それぞれにあった東島神社と西島神社は，代替地では一つにまとめられて桑島神社となった。また，ユニークな円筒型校舎で知られた桑島小中学校（東島）は，白峰小中学校に統合された。

（写真提供：仲川茂）

ムツシ・アラシ（山作り）一考察

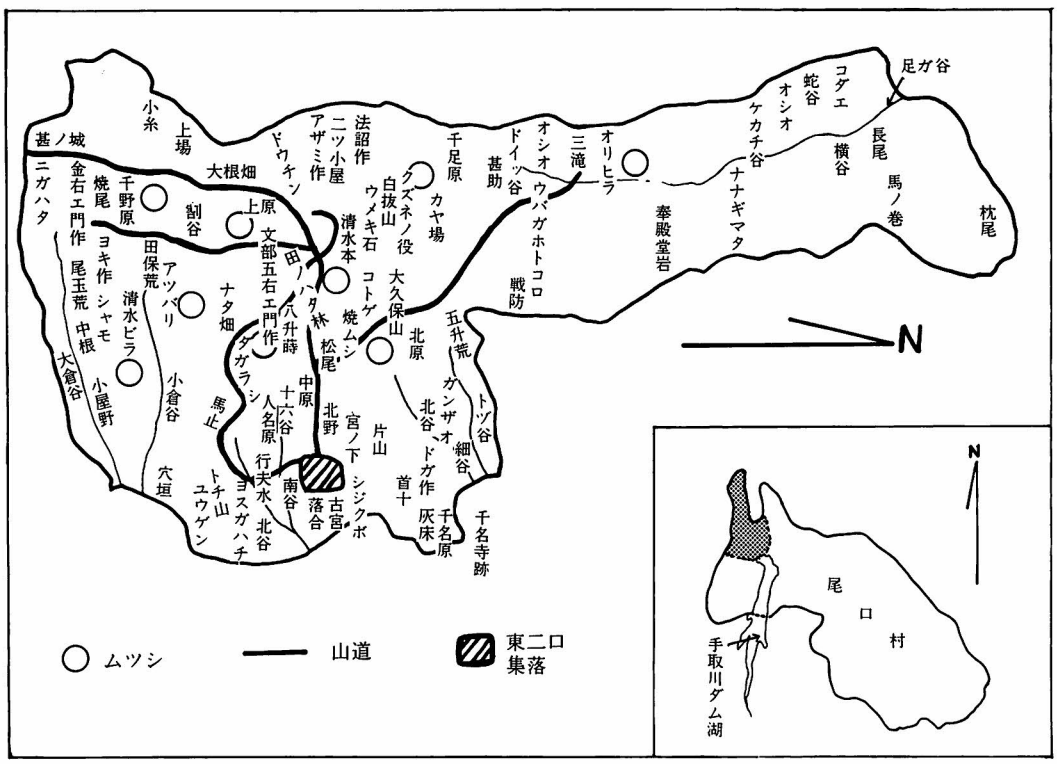
善　財　宗一郎

山作り耕作

ムツシ・アラシ（山作り）は，白山麓でよく聞かれる。たとえばムツシ・アラシについての古文書に有坪とあるのは，一定の面積があって，山の地名を示し東西南北の境を明らかにするものである。ところで本来はどのような形態であったかこの点になると識者によっては色々に定義されているようである。この形態は白山麓の特色ともいうべきものであり，この地域の生活史を探るための手がかりと考えられる。

ムツシ・アラシともに普通名詞であり，端的には常畑である。ムツシは緩斜面，即ち豆コロビの山地，傾斜10度から18度程度の山作り地である。これに対し，アラシは多少条件の悪い山作り地を云う（成育する木は雑木で主にマルバ，ウツギである）。

ムツシ・アラシはともに半永久的に収穫可能な山地の状態を意味するもので家族がその場所に定住して，自給自足の生活が可能なだけの面積を保有し，かつ水の便がよく，小屋場，副業的には桑(蚕飼)，時には杉苗作りも可能な山地である（山作りという呼び方は近世末期―1850―年代に識者によって名づけられたものであろう）。従ってムツシ・アラシは毎年薙畑（焼畑）する山地ではなく，薙焼を必要とする山地は主にアラ山である（成育する木は雑木であるが，一般には堅木といわれ，主にナラ，リョウブ，イタヤカエデ，または，サルスベリ，メジラ，ヤマボウシ，マルバマンサクである）。



東二口地内地名とムツシ・アラシ見取図

明治中期までは100戸を数えた二口村は，その8割近くが山作りを生業とし自給自足の生活であった。長くて5年程度を耕作の限度とする薙畑だけに頼っていては，薙畑する山地は，4，5年でその耕作地をなくする。ムツシ・アラシもともに薙畑を初年に限って必要とするが，5年目以降は，ムシ畑と呼称し，特に耕作に必要なことは草を刈って肥料に用い，または下肥が必要であり，半永久的（12年，24年，30年，50年の年期）にわたって耕作が可能な山地である。

薙畑可能な山作りを全てムツシ・アラシとは呼称しない。薙畑は山地であれば場所の選別は殆どなく，木を切り，焼いて耕作するが，長くて5年位を耕作の限度とし，作付も主に播種である。

二口地内の中原より（東二口地内地名，ムツシ・アラシ見取図参照）南北に下方の山地を薙畑しても，ムツシ・アラシと，昔から呼称したことのないことだけは確かである。

この耕作（ムツシ・アラシ・薙畑・メグラ畑一人によってはグルリ畑または常畑ともいう）の相違については下表のとおりである。

耕地の請と卸し

ムツシ・アラシの請，卸しについて，明治10年以前の「A請人」と「B卸人（親ッ様）」との会話を再現し参考に例示する。

なお，この会話については，山崎吉次郎氏（明治8年9月12日生），道下清五郎氏（明治23年3月9日生），林甚八氏（明治29年2月24日生），土井下正男氏（明治37年1月14日生，昭和57年12月28日死去）の4名（故人）および表志乃氏（明治26年2月11日生，昭和56年8月31日から金沢市三十苅町に居住）からの聞取りのほか幾人かの古老の話を総合して詳述するものである。方言と考えられる言葉は仮名書きする。

A請人『親ッ様（旦那）アガラッシヤマシタカーまたは，クワッシヤマシタカー（お食事がすみましたか），カカサ（奥様）ノベニ（何

東二口の山作り耕作の相違

区分 土地	距離	場所	年期	環境	肥料	耕作期間と作物	居住形態	副業
ムツシ・アラシ（山作り）	在所から4～7km	上原（清水の元）岩越・事下 ・千野原・八升蒔 ・小屋野・中原 ・北原・田保荒シ ・足ヶ谷・千足原	・12年 ・24年 ・30年 ・50年 半永久的居住	・水の便が良い ・小屋場	・草を刈って「ウネ」におく ・下肥を使用する	・半永久的に耕作 ヒエ・アワ・豆類	・各地に散在して居住する小屋を中心に山作りをする。 （近世に，母村と連絡をするようになってから出作りと呼称）	養蚕 桑作り 杉苗作り 炭焼
薙畑（焼畑）	1～7km	・炭焼跡 ・ホエ切り跡 ・特に場所を選ばない	・長くて5年	・水に関係ない ・全く条件がない	・不要	・1年目ソバ・ヒエ・大根 ・2年目アワ ・3年目豆類 ・4年目ソバ ・5年目カマシ等以後はアラ山となり作付不能	定住しない	なし
メグラ畑（常畑）	1km以内	・家のまわり	・永久居住	・居住地のまわり	・下肥使用 ・草を刈って「ウネ」におく	大豆 小豆 前栽を中心に作付	母村 集落形成 神社・道場	養蚕・炭焼 （近世になって，ボッカ・コビキ）

時も）有難トウゴザーマス．己（私）去年ノ春カラ我御寮モデカーアコトデ(多くて)，ムツシ（山作り）ヲ，チョコット（少し）請サシテ，モラアートテ(いただきたい)，親ッ様ネ頼ノミニーまたはオネガーアニーアガリマシタ．己，口スギ（生活）ショットモテデゴザァーマス．口スギシターガアデ，ドウカコノトオリ（頭を下げる）オネガー申シマス．』

B卸人『ソゥカ，ソゥカ，ソンナラ（それでは）話ニヨッテワ，ワレニ卸スワイヤ，年貢ハ銭デモ，稗，粟イクラニ，ショヤラ（するであろうな）ソレガ難シケリャ（場合），ワレノ内ノ小坊（末弟）ヲ家来ニ，小女ーまたは尼ーヲ雑使（女中）ニイクシヤ，チャント内デ一人前ニシテ所帯デモ嫁ニデモ，出スワイヤ，心配シンナヤ．』

A請人「親ッ様ソウサッシヤマセ（そうして下さい）．コリャハヤ勿体ナイヤ，オ陰様デ有難ウゴザーマス．親ッ様ノ云ワシャルコト，ゴモットモデゴザーマスガ，己ガ請ケル，ムツシーまたはアラシーワ12年ノ年期ガアーテ，ムシ畑デゴザーマス．サカアー，チョコット（少しは）ワ安シテ下サッシヤマセ．モウ，ヒトマワリ（一回）作ラシテモラアートテジャ，ドウカ頼ンマス．』

B卸人『オ前ガソウ云ウナラ精一パイ安シテ，ヤルワイヤ．オ前，ココロエトケヤ，桑ムツシモアルサカァーノウ，内ニャ蚕飼ヲ買ウトル，オ前ドウヤ，通イ作（季節出作り）ジャロサカァー，イワガリ（夕方）ニ桑コイテ（桑をつんで）持ッテコイヤ．小屋ノグルリ（まわり）ワ前栽モンガ作レルワイヤ．』

A請人『親ッ様左様デゴザアーマス．云ワッシヤマスヨウジガ(その通りであるが)，卸シテモラアーウ，ムツシネ，ヒツイテ(離れず)オル，ソバノ，アラ山ヲ己ネ，炭ヲ焼カシテ下サッシヤマセ，己ジヤ，炭ガ百俵位イ，ゴザアーマスト思イマスガノゥー．ソシテ下サァーマセヤ，アラ山デ親ッ様ノ，シンギヤネ（こっそりと）チョコット，薙ショットテデゴザーマス．ズイットデ（何時も）気兼ヤ

東二口の家々

ンド作ラシテ下サッシヤマセ，ドウカオネガァー申シマス．』

B卸人『ソウカ，アラ山ノ下ノ方ワ，デカァーケンドタカノ方ワ，ホセクイ（ごく小さい）ノヨウナホモアルジャロナァー，ソウヤンド，勿体ナイ，ホエ（小木枝）モナイモナ，ナゲント（すてないで）ホエニシテ持ッテコイヤ，秋ニャ，炭ノ3俵モ，デヤマノ時内ヘオサメヤ．』

A請人『親ッ様，ズイット勿体ナイ，勿体ナイ，己ガロスギャ．』

このような会話中に親ッ様は家来に云つけてチョウジャ（旦那の寝室）の大帳を取りよせ会話の内容を記す。

後日保証人を立て請卸の文書を作成する仕組である。これが現存する多くのムツシアラシの古文書作成の状況である，多少なりとも往時のことを知る手がかりとなる。

耕作期間を4，5年とする薙畑がムツシ・アラシの一般定義のように考えられがちであるが，半永久的に，家族が生活でき得る一定の面積を有する耕作地，即ち山作り地をムツシ・アラシと見るのが自然のようである。

（尾口村役場）

ムツシとナギハタ

千　葉　徳　爾

耕作地の呼称

尾口村の東二口は現在では文化財の「でくまわし」を保持してきた土地として知られています。昭和59年の3月にここを訪れて，旧家の善財氏（尾口村役場勤務）からムツシについていろいろと教えていただきました（同氏の意見については本号に別掲）。その結果、私がこの「はくさん」第11巻第1号に書いたような出作りについての疑問について，それを解く上での鍵になるような事実が少しずつわかってきたように思います。

私が疑問にしたのは，簡単にいうとつぎのようなことでした。これまでの考えかたの多くは，白山麓でひろく「出作り」が行われてきたのは，谷底の集落の人口が増すに従って耕地が不足するようになり，それを補うためにふえた人びとが山中にナギハタをひらいて食糧を得た，こうして季節的なナギハタ出作りがはじまったのだという説明だったわけです。しかし，地名とかムツシ（山中の出作り地の一区域）の経営方法，その借地期間などからみると，これまでの出作り生活とはちがって，ずっと古くから，ムツシの農耕に加えて養蚕や木工業を行なう経営形態があったのではなかろうか。これが私などの抱いた仮定だったわけです。そのような見方でこれまでの村史の資料や現地での見聞をみなおすと，善財さんの御説明が大そう役立つように思うのです。そのうちで，今回はムツシという場所のことを主にして述べてみましょう。

まず，佐々木高明氏（国立民族学博物館）も注意しているように，同じく山を焼いて耕作する場所を指す言葉でも，手取川流域だけに3通りの呼称があります。尾口村の東部尾添川流域ではアラシが焼畑経営をすべき土地のことです。ところが西部の東二口方面ではムツシになり，アラシという言葉はムツシの中にナギハタをひらいたあと耕作を終え，そこを休閑させている部分の名称になります。そして手取川上流部ではムツシの用法は同じですが，その内部の常畠として利用する部分をキャーチ（垣内とあてるらしい）と呼ぶのに対して，東二口や深瀬などではセンザイバタというのが普通だったようです。こういう土地は尾添川流域ではムシバタケといっていますから，これらを組合せるとこの地域全体としては，焼畑地をさす言葉に尾添川流域，手取川中流域，手取川上流域の三つの区分ができます。

言葉は文化の系統を知る有力な方法の一つですから，少なくも上流の白峰方面と下流の尾添方面とで，同じ焼畑についてもそれを行ってきた人びとの，技術文化には系統の上で多少のちがいがあると思われます。たとえ

でくまわし

ナギハタの火入れ

ば尾添で焼畑経営を行う区域をアラシというのに，東二口や深瀬，五味島などではそれは焼畑（ナギハタ）のあと休閑させて林木が生育しつつある土地のことですから，両者をくらべると尾添の方面ではナギハタの休閑期間にすでにつぎの焼畑経営にとりかかる，といった休閑期の短かくなる傾向，あるいは林地使用の集約化が進んでいるということも推測されます。そのほか，「尾口村史」第2巻によりますと，尾添の焼畑火入れ方式は伐採・乾燥させた枝や草を斜面に横に何段も列状に並べ(ウネ)，上部から火をつけて1列が燃え盛るとイブリで2列目に引きおろし，順次下方まで充分に焼いてゆくヒキズリ焼きが行われます。この方法は手取川流域すべてに共通ですが，東二口方面では小規模なナギハタには下方から点火しウネを作らずイブリで火をならさないベラヤキという方式があります。こうした技術上のちがいが言葉のちがいに対応してみられるのは興味あることで，これも二つの流域の焼畑文化の系統のちがいといえるでしょう。

東二口の土地利用

水没した五味島地区の老人が，「ナギ(ハタ)を何度でもつくりかえられる場所がムツシで，再利用できないような土地はムツシとは言わない」と述べている（尾口村史第2巻）のは，ムツシの性質をよく示しています。1840（嘉永2）年に桑島の相原助五郎という人が，杖村の地内にある自分の所有地を見分した結果を帳面にして残していますが（白峰村史下巻)，杖の藤左エ門という老練な人に案内をたのんでムツシを検討した結果は「人びとの見所ありてむつしの肥・不肥，薪の手寄，水の手，雪なだれ，小屋場の様子，桑のそだち，蚕飼のよしあしの勘へ(かんがへ)，はけミものの手寄等様々に其人の見込替るもの」と記しているので，必ずそこにある期間居住するもので，単に谷底の集落から通い作をする土地ではないことがはっきりしています。

また，ムツシの経営目的についてこう述べています。「牛首（白峰）・嶋（桑島）等の人ニ蚕飼を大事ニ飼ふ故，作と桑と見込故に年季ながくほしがり，代金高く共いとはず。杖村の人は桑は望まぬから年季みじかくても相済，其替りに金ハだし申（さ）ぬなり」。したがって，ムツシの状況も両地の人の判断条件がちがうというわけです。善財氏によると東二口などでもっともよいムツシは「豆ころび」つまり豆が転ばないかというほどの緩斜地を含むのがよく，それより急になるとアラシと呼んで言葉を使いわけています。また，ムツシの内部のナギハタにしがたい場所を，アラヤマといって製炭・薪材をとる土地として区分しています。同じく樹木でも桑・杉を植えて商品の生糸や柾板をつくる土地は桑ムツシ，杉ムツシで，前記相原氏の帳面でもムツシ評価の一条件とされ，その良好な場合にはこのムツシが桑島や白峰方面にあれば，ずっとよい値段で一作おろしができるのだが，杖にあるので安く評価せざるを得ないと嘆いています。

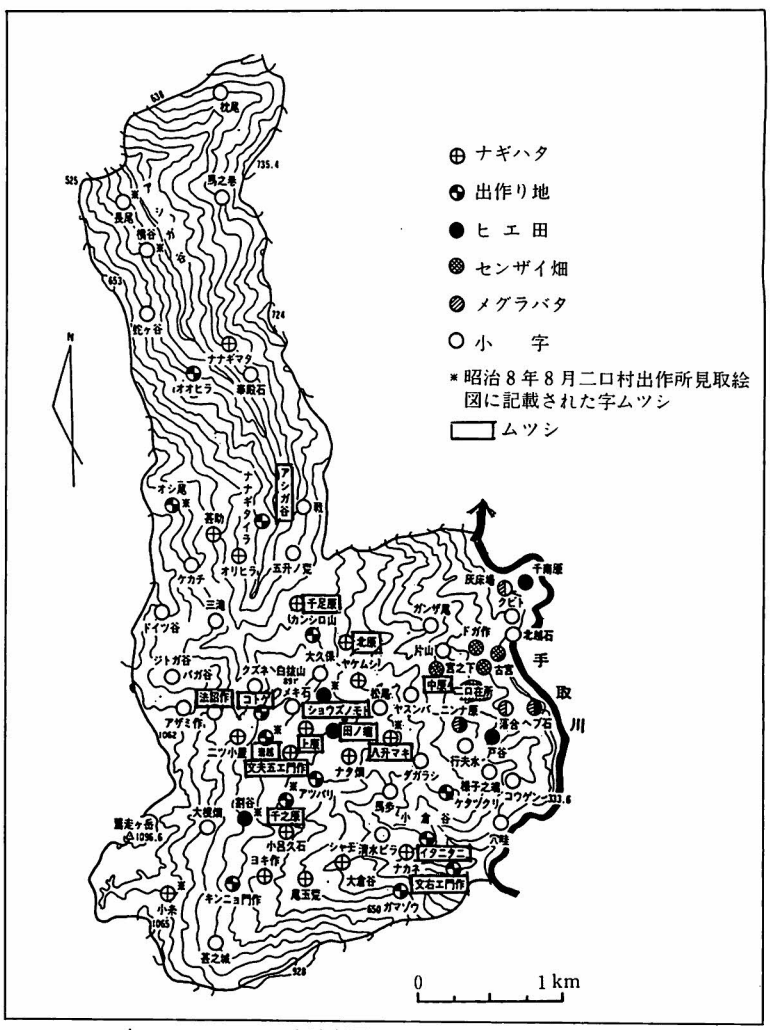
さて，東二口では「豆ころび」といわれる土地は鷲走岳（わっそだけ）の中腹緩斜面に多く，ここから遠く杖・左礫方面に延びる尾根から中腹斜面にムツシが分布しています。それに対して東二口の集落から下の手取川の谷の斜面では，ナギハタはあってもムツシはほとんどないのです。手取川ダムのできる前に，私は女原を通る旧道から東二口の集落を見上げては，どうしてあんな山の上に集落をつくったのだろうか，と不思議に思っていたのですが，800～900 m の高さによいムツシがあるときけば，集落がそこに近い高い土地にできても当然といえます。

現在は北海道に移った東二口の旧家斉藤氏は，1670（寛文10）年に記された二口村惣百姓から奉行所に差出した訴状の写を所持しています。それによると，古い時代に二口は西谷流域大日川の支谷足ガ谷(地図参照)にあったが，折々盗賊に襲われるので現在の東二口に移ったとあります。東二口には当時の屋敷

跡もまだ残り，よいムツシといわれます。いま，尾口村の村界が足ガ谷の部分で鳥越村側に分水界をこえて長く突出しているのは，そこが東二口の土地だった名残りでしょう。

いま，1875（明治８）年８月（夏作の収穫直前）に作られた東二口村の耕地を「尾口村史」によって観察してみましょう。センザイ畑，メグラ畑はいわゆる常畠で，二口村在所の周囲だけにあります。ムツシで稗を水田につくっている場所は，鷲走岳の中腹約900 mまでの「豆ころび」の土地です。田のないムツシは足ガ谷方面までいくつか分布し，それから通い作の可能な0.5～１kmの山腹や尾根に何か所かのナギハタがみられ，ナナギタイラ，ナナギヒラなどの地名は菜・大根を栽培する小さいナギハタです。こうしてみると，谷底の農家が水田や常畑を集約的に利用して食糧自給経営を行ったのに対して，ムツシを利用する農家はナギハタで食糧を自給しながら，桑や杉を植えて商品生産を目的としたので，経営方式がちがっていたといってよいでしょう。

（明治大学文学部）



東二口のムツシと土地利用（尾口村史第２巻掲載図に加筆）

白山麓採訪記

小泉　凡・大野一郎

今年（昭和59年），雪残り，春まだ遠い白山へ3月29日から31日まで，民俗採訪の旅をしてまいりました。この旅行では，多くの興味深い習俗を教えてもらうことができましたので報告してみたいと思います。

マルケヤク

今回，教えていただいた興味深い習俗の一つに「マルケヤク」（マルケヌシ）という死の忌を一手に引き受けるということがありました。

私達の祖先は，死の穢（ケガ）れを黒不浄と呼び，死者の近親者は神前に出ることをはばかるばかりでなく，喪家の火で煮炊きしたものを食べた者も，喪家に足を入れただけの者にさえ，穢れが感染するように考え，おそれました。たとえば伊豆の三宅島では50日間も身内の者が籠るイミヤドというものがあり，初めの15日間は往来を歩くことさえ許されなかったそうです。

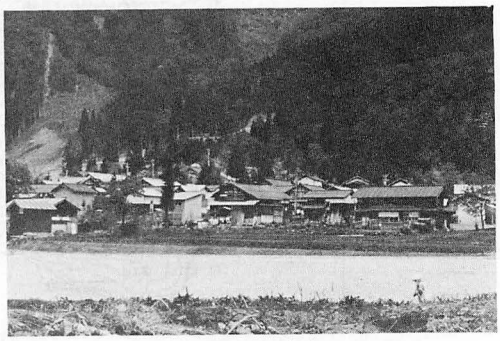
このように，おそれられた死の穢れですので一定期間忌み慎んでいなければなりませんでした。三宅島ほどではなくても，私達は7日目を初七日として祭壇を片づけたり，家族や近親者が飲食して忌中ばらいや精進落しを行ない，四十九日にも餅をついたり，精進あげを行なったりします。この死の忌を早く攘（ハラ）ってしまいたいと考えるのが人情ではありますが，東上総の海岸では，ナゼといって船のまわりを寺からもらって来る幣束（ヘイソクヨウ）様のもので撫でて，海に流してしまうという方法をとっていたといいます。「マルケヤク」の習俗も死の忌を1人の人に引き受けてもらうことによって，他の人が早く死の忌を攘（ハラ）って普通の生活に戻れるようになるための方法の一つと考えられます。

さて，白山麓の「マルケヤク」の実際について報告したいと思います。

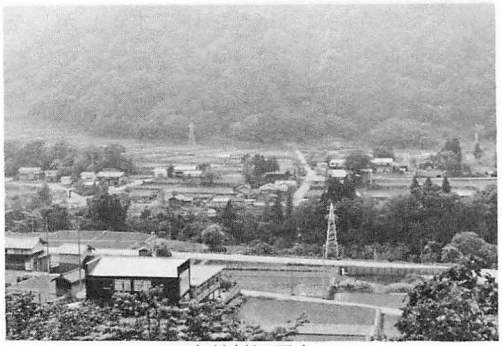
〈中宮〉　死体をドバコに入れるために縄をかけるが，これをマルケルという。マルケた人が忌をかぶって，一週間何もできず，オヒイサン（御日様）にあたってもならぬといい家に籠もる。これをマルケヌシと呼び，亡くなった人の子，特に娘など女の人がすることが多い。これは仕事の関係だともいう。2年程前，火葬場が新設されて寝棺になり，マルケルことをしなくなったので，この習俗は消えたという。

〈東二口〉　人が死ぬと，下を縫わない白い着物を着せてマルケル。着物を着せてから，手を合掌させ，善光寺からいただいた木の数珠をそれにかけ，イツハバ（ヒトハバ＝九寸）の袋に，座った状態にして入れる。そして，袋の真中と上部の2か所を麻などのひもでしばる。とくに真中のものを「チカラオビ」と呼ぶ。マルケル人が忌をかぶるのか否かは不明。

〈河原山〉　亡くなった次の朝にマルケル。丸裸（フンドシくらいはつける）にして，ワラとワラを結んだ縄で，足をまげて，合掌させる。そこで袋状にした白木綿で包み，5か



吉野谷村中宮


鳥越村河原山

所くくる。これをマルケルといい，昭和50年ごろまでやっていた。最近ではマルケた後，塩や水で手を清めて終りなので，マルケヤクのようなものはないが，昭和10年ごろには都合のよい人に頼んで，死者の着物やフトンをあげる代わりにマルケヤクを引き受け，忌に服してもらうということがあったという。

〈瀬波〉　ここではマルケヌシが出来ないと，都合のよい人に頼んで忌に服してもらったという。

〈白峰〉　ここでは，現在寝棺になっていて，マルケルことをしないが，死体を棺に入れることを，マルケルといっている。

道場について

今回の採訪旅行では，また各集落の道場，及び道場主の存在も興味深いものの一つに思われましたので，このことについて，次に触れてみたいと思います。

吉野谷村や尾口村の殆んどの集落には現在でも道場があり，集落における寺院の代役をつとめているといえましょう。この道場については，中宮・河原山・東二口を訪ね，少々お話を伺いました。その規模は様々で，東二口のように集落に1軒しか道場がない場合は壇家数も当然多く，尾添のように6軒もある場合には，壇家が2軒というケースもみられます。道場主は「ゴボウサン」（東二口），「ボンサン」（河原山）などと呼ばれ，いずれも，殊に葬儀や報恩講などの行事を通して集落の人と密接な関わりをしています。

柳田国男氏は『毛坊主（ケボウズ）考』の中で，このような道場設立の所以について，「生涯の罪の絆はどうにかして解いて死なねばならぬとなると，引導なり血脈（ケチミヤク）なり兎に角三途川の通行手形を発行するだけの機関は，への字なりにも具えて置かなければならなかった。そこで多くの毛坊主が移住し来り又は開業する必要が起ったのである」と述べています。つまり，近江・飛騨・越前・加賀などの真宗地帯の山間部には，交通の不便さも手伝って，里の本寺との結びつきが必然的に疎遠になるため，殊に葬儀の際などの不都合な点から，半僧半俗の道場主，すなわち一般に毛坊主（有髪であるところから）と呼ばれる人たちが出現したというのです。

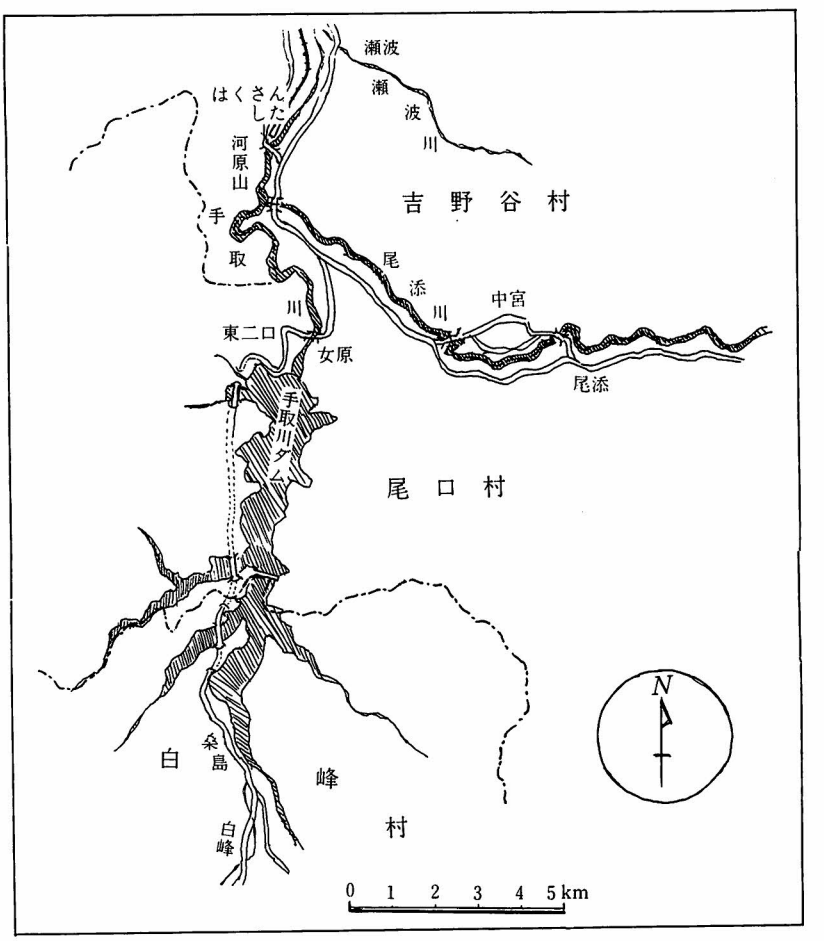
集落の人々が道場に集まるのは，「ホンコサマ」或いは「オコウサマ」といった行事の際です。前者は，開祖親鸞上人の忌日にあたる11月28日に行なわれ，中宮では戦前まで豆腐の中に小豆を入れたおつゆ，味噌汁，大根・人参のなますなどを膳にのせて持ち寄ったといいます。後者は月に2度，6日（先代上人の命日）と28日（開山上人の命日）に行なわれ，東二口ではこの日に豆腐，ぜんまい，蕨，やまいも，うどの酢のものなどを家でつくりお膳にこしらえて，戸主のみが道場へ行き，一方道場ではカチマメと大根のおつゆをつくり，集まった人たちに配ったということです。その他，かつて東二口では「茶ごと」といって，2月の中頃にゴボウサンが各家を巡りおつとめをし，家々では茶の子（クリやカヤの実）を出したといい，現在でも日を決めて道場に集まり，お茶を飲むという形でこの行事が残存しています。これらの行事からは，単に宗教的意義のみでなく，直会（ナオライ）をして楽しく時を過ごすという，今でいうコンパや飲み会的ニュアンスを感ぜずにはおれません。またこれが，殊に冬期間の生活をリズミカルなものにするための原動力とも成り得たのではないでしょうか。

習俗に見られる地域差

以上，白山麓の数か村の習俗をみて居りますと，興味深いことに気がつきます。マルケヤクを見てみますと，忌の軽重が，地域によって，特に山に入った所ほど重く，道路沿いでは軽いことが，先の簡単な報告からも感じられます。中宮のように大きな道路からはずれた山の中の集落では，マルケヌシという役が残っているほど忌が重く課せられ，古くから栄えた白峰では，もうその伝承が聞けなくなっていますし，河原山，瀬波といった，両者の中間に位置する集落では，マルケヤクの伝承が残っているとはいえ，人に頼むことも出来る軽いものとなっています。同様のことが，道場の存在についても感じられます。この道場とは，真宗寺院の前形式をなすものといわれますが，実際，白峰では既に道場はなく，すべて寺院に昇格しています。しかしながら，河原山，東二口，中宮などでは現在も道場として，葬儀やホンコサマ，オトキ（秋から冬にかけて人々を呼んで御馳走する）などを通じ地域の人との関わりをもっています。特に尾添など山に入り込んだ所では，道場が6軒もあるというケースもみられ，同じ白山麓といっても白峰などと較べて地域差というものを感ぜずには居れません。

先の簡単な報告のみから断言する訳には勿論まいりませんが，マルケヤクを通して，白山の人々が死の忌をどの様に考えていたのか，また，一民家として寺院的な役割を果たしてきた道場を考えることによって，仏教以前の葬式のあり方はどうであったのか，といった問題を今後の課題として探っていきたいと思います。

（成城大学大学院）



手取川・尾添川流域周辺図

牛　首　紬

西田谷　功

霊峰白山の麓にある石川県石川郡白峰村には，養蚕から機織りまで古い技法を守りながら織り続けられてきた伝統織物「牛首紬」がある。もともとは2匹の蚕が作った大きな玉繭から挽いた玉糸で織るために，糸が太く節のある織物で，冬季の農家の副業として織り続けられてきたものである。ところが，手取川ダムの建設によって，紬の里の一部である白峰村桑島地区が昭和54年に水没した。本論は牛首紬の実態と課題を報告するものである。

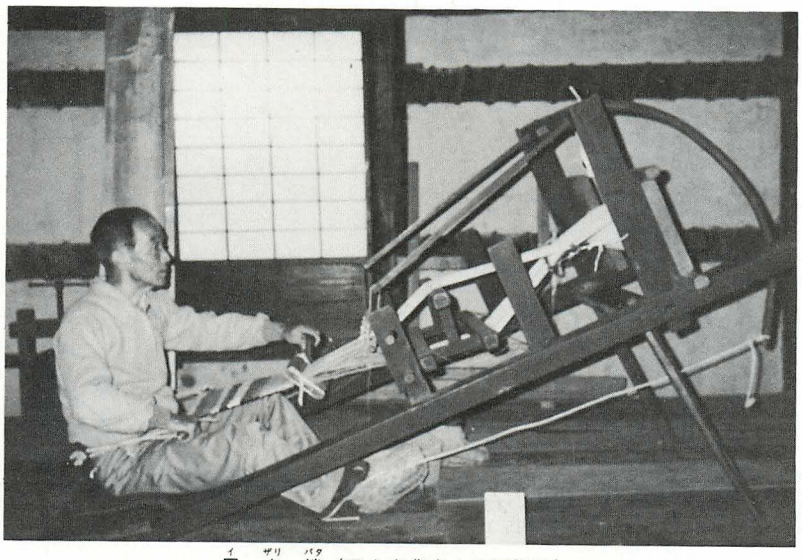
牛首紬の由来

牛首紬がいつの頃から製織されたのか，その起源は定かではない。平治の乱（1159年）で敗れた平氏の落人が，桑島に逃れてきたが，その妻女が機織りを村人に教えたのが始まりと言われるが，伝承の域を出ていない。

我が国の紬には，14世紀からの生産が明白な結城紬の場合もあるが，大半は17世紀以降に幕府の天領代官などによる保護奨励策によって著しく発展したものが多く，大島・上田・長井をはじめ，北陸の北庄・白峰・井波・栃尾などがある。玉繭・屑繭を原料に地機（居坐機）によって農家の副業として織られてきたものである。

ところで，白峰地方は，古くから養蚕の産地であり，生糸を納めたあとに残る玉繭や屑繭があり，製糸の技術が優れている所である。しかも，ここは寛永20年（1643）頃，京都の旅宿業者松江重頼の作である『毛吹草』にもある牛頸布・嶋布の産地であり，貞享期（1684～8）の『白山紀行』やその他にも記されている牛首糸・山繭糸・台木布・苧屑頭巾などの産地であり，またかなり高度の機織りの技術があったこととを考え合わせると，自家用織物としての牛首紬の起源は17世紀以前と推測されるが，正確な史料は見あたらない。

元禄期（1688～1703）以降，牛首紬は生産は少ないものの，各地で珍重されていたと言われるが，少なくとも，享保期（1716～36）には粗大糸を経（糸），屑糸の手紡を緯（糸）とした釘貫紬（牛首紬の別称）の名称をみる



居坐機（西山産業白山工房提供）

ことが出来るし，また天明9年（1789）発行の『絹布重宝記』には，釘貫太織が加賀より出ると記されているのである。

釘貫紬は，その後，文化・文政・天保期（1804～43）には大幅に生産を伸ばすとともに各地へ売りさばかれている。

桑島の杉原亀十郎家文書には，物資の移動を示すまとまった史料は見あたらないが，文化7年（1810）の大部分の仕切書・領収書からは，他地域との商取引がうかがわれ，その中に生糸や紬の語が出てくる。同15年の杉原家への入り方では関係者114人中，糸代は41人，布代46人であるが，紬代は5人であり，3疋（ヒキ）～1疋（ヒキ）半と嶋布に比してきわめて少ない紬の量であった。

文化・文政期以後，中でも天保から安政に至る20余年間は，盛んに，紬を江戸へ移出したのである。

明治以降の展開

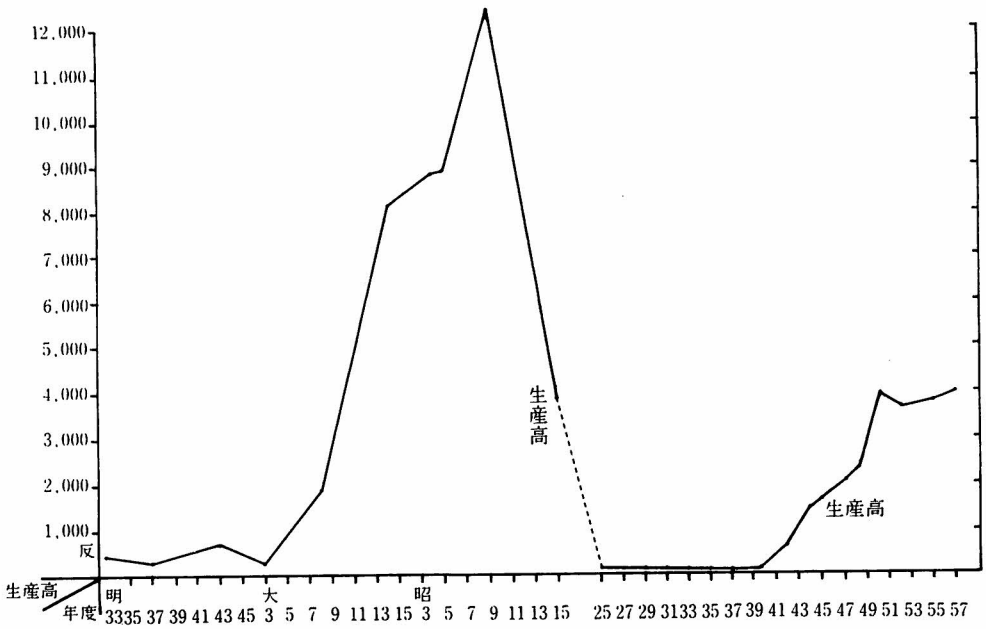
明治8年の桑島物産届には紬は15疋（ヒキ）と記されている。同10年の桑島物産表には繭・生糸の産額が出ているが，紬の産額は見られない。同20年代初期には，白峰村大道谷往来で300反の紬が移出されているが，同27年の白峰村移出入物資統計には紬の移出入が読みとれない。これは生糸・繭が多いこともあるが，数反の紬を織っても，販売用の商品が主力ではなく，あくまでも，農家の副業，自家用織物の域を出ていなかったためである。

紬の生産は，明治25年頃から加藤留屏らの努力によって，細物としての糸質と筋をそろえたり，練り方を工夫したりして，座織りからバッタン機（ハタ）変形の特殊な機へと改良された。この頃から農家や機業場で紬織りが盛んとなり，同36年には200反の紬が移出されている。

同42年に水上鶴吉が紬織りを始めたが，その後，嘉久越合名会社が大正7年，藤場利之吉が同8年に紬織り，水上は同12年に釘抜紬を始めるなど，大正期は製糸業の退行に代わって紬織りの機業場が相次いで操業した時期であった。

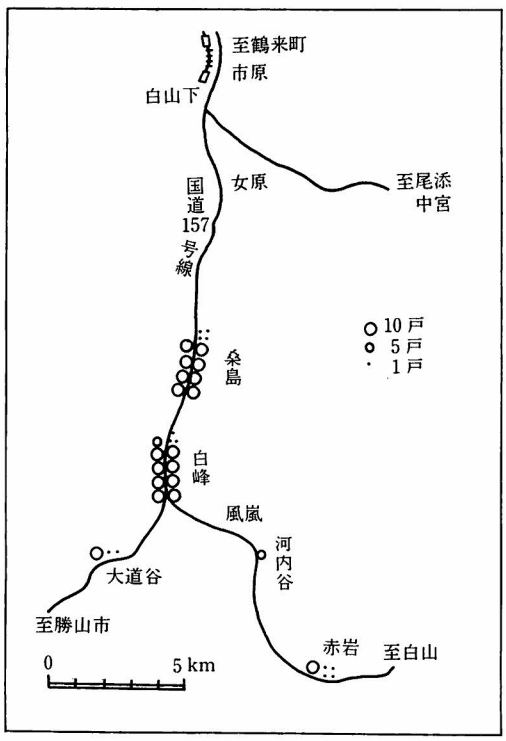
大正12年の紬の織物製造者台帳では，紬織

牛首紬の生産高（「白峰村史」及び聞き取りより作成）



が白峰の88戸，桑島の89戸など211戸を数えており，その生産量も増加した。明治33年の450反，同43年の627反，そして大正8年は1,859反となり，昭和9年には1万2,587反を数えるなど，冬季の余剰労働力を背景に機械化とともに生産高は大幅アップとなった。

しかし，経済不況による需要減退と進行する機業場化の中で，零細な織物業者は廃業に追い込まれていった。一方，ニーズをつかみ切れない縞紬などの染色物は白生地に転向した。やがて，太平洋戦争の激化とともに，軍需生産が最優先されるようになり，高級品である絹織物への風あたりが強くなった。国家総動員法についで，昭和15年の奢侈品等製造販売制限規則の公布，その後の企業整備会などにより，白峰村でも紬織工場は軍需用の真綿製造への転向及び組合設立による細々とした経営であった。



紬の織物業者数
（大正12年「白峰村史」より作成）

養蚕と製糸

耕地率が1％もない白峰村は，古来生糸及び養蚕業を本業としてきた。桑島の山口新十郎家文書の質入・借用証文には，万治・寛文・延宝期（1658～80）のものが数多くあるが，その大半が返済期限を「蚕飼切」と繭・生糸の生産時期に合わせているのは，養蚕が身近な現金収入であったからである。薙畑耕作の適地を「むつし」と言い，白峰村には数多くある。その「むつし」には桑が植えられていたが，出作地域の各所には大桑原の地名が残存するなど，大木仕立ての桑が散在していた。慶応2年の織田利太郎家文書「万歳記」には「養蚕は当谷第一の産業」と言い切っている。明治10年の桑島物産表では産額の48％が生糸で，30％が稗（ヒエ）であり，養蚕は重要産業であった。

明治初期は「尺余の細竹を手にして」の幼稚な手挽きから，やがて座繰挽（ザクリビキ）となり，同12年には白峰製糸社，同23年には白峰製糸場が設立されたように，20年代の座繰製糸，30年代の機械製糸が主であった。

白峰村の収繭高は，明治33年の6万kg，大正8年の2.1万kg，昭和9年の1.5万kg，25年の0.8万kg，44年の0.5万kgであり，減少の一途であった。

昭和45年の農業構造改善事業として，大道谷西山地区で桑園が造成されたが，地すべりの発生で規模縮小となり，この結果，低生産性と人件費の圧迫により経営は不振であった。桑島水木平（ミズキダイラ）の桑園もダム建設で同48年に解散した。

昭和54年の飼養戸数は20戸，桑園面積33 ha，繭生産量3,537 kgである。従って，牛首紬に使用される繭は，早くから大半を長野・群馬県など県外に依存しており，河北郡にある連合会，その他仲買人を通して搬入している。ただし，不足する玉糸の代用として二番繭が使用されるようになったので，昔と比して，節（ネップ）が少なくなり，生地が薄くなってきたと言えるが，一本一本を丁寧に打ち込んだ手織りだけに丈夫でもある。

牛首紬の生産と流通

戦後，白峰村養蚕組合は紬の復興に奔走したが，混乱の世相では食糧の確保が先決であって，原料繭の確保は至難であった。しかも，苦労して確保した繭で紬を織っても，製品は一向にさばけなかった。ガラ紡・トップ染・機械生産などと悪戦苦闘したが，伝統の味を出せなかったことと需要の不振から，次々と廃業していった。

しかし，やがて繭の確保が出来，農作業の副業として，細々と織り続けられるようになってきたが，それも年40反弱の紬生産にすぎなかった。それさえも「春に預けた呉服店へ代金を取りに行くと紬を返品される」苦難の時代であった。

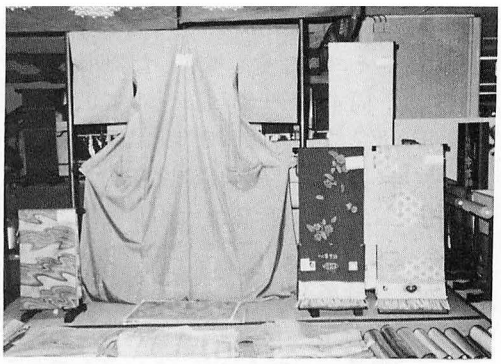
ところが，昭和30年代に始まる高度成長経済を背景とした所得の向上は，手作り製品の良さの見直しとなり，伝統的工芸品は，再び脚光を浴びるようになってきた。特に昭和40年代頃からは，全国的な「紬ブーム」が起こったが，このブームと手取川ダム水没とをからませた雑誌・テレビなどの報道によって，紬は全国的に知られるようになり，需要が増え，生産量は大幅にアップしたのである。

昭和48年，ダム建設を契機に，牛首紬の振興策と将来像について，栃木・埼玉・長野・静岡の各県繊維工業試験場長は次の提言をした。

・玉糸使用の手織り紬の品格保持に努める。
・現在の2業者が各々の特色を出す。
・牛首紬の優秀性をＰＲする。
・組合的機関に組織化する。

加藤機業場では，この道60年の加藤志ゆんさん（今年5月に亡くなる）を中心に白生地の紬が織られた。昭和50年に約400反の盛況であったが，51年には，ダム建設による移住が本格化して200反と半減した。生産された紬は全て個人の注文に依存しており，顧客は地元の石川県が約半数を占め，次いで福井県の20%，他は北海道から九州までの全国に及んでいる。

一方，西山産業は昭和42年から操業を始めたが，白峰・鶴来の2工場，織機30台で昭和51年に3,600反を織り，金沢市の商社を通じて全国への販売ルートに乗せている。



牛首紬（西山産業白山工房提供）

西山産業は，研究の進行とともに，白生地のほかに，金沢市専光寺町の加賀友禅染色団地などとタイアップして染色に取り組み，その成果の一部は，昭和50年に金沢市内のデパートの催し物として，手織りの実演及び展示品の披露となり，好評であった。

加藤機業場の白生地のみの生産に対して，西山産業は，草木染や絣などの染色物にも力を入れている。牛首紬は二つの方向へ動き出したが，いずれも紬への深い愛着と存続への果敢さにあふれている。

昭和52年11月，加藤機業場は，桑島の水没地から代替地へ移転して操業したが，代替地に残った戸数が4分の1であり，働く人数も大幅減となり，生産量は最盛期の3分の1であった。機業場の周囲にはホテル・物産館・水没公園などがあり，観光客などの見学者が増加したが，不況のあおりもあって，得意先の呉服店からの注文に変化はないが，個人客の注文は不調であった。

昭和53年，西山産業は不況を乗り切るために，各種商品開発に力を入れ，従来の産元商社依存型をやめて，西山産業開発株式会社を設立して，草木染・絣などの商品開発を積極的に推進した。

昭和54年7月24日，牛首紬は伝統と品質が評価され，石川県指定無形文化財になった。

伝統的工芸品産業に関する法律の制定後，

石川県は，主要都市で開催の「観光と物産展」のテコ入れ，実演・販売もする県観光物産館の建設，及び県産業展示館での工芸展の開催などＰＲに努めてきたが，牛首紬はこれら催し物に積極的に参加してきた。特に染色などファッションに携わる時，展示会や物産展の参加は問屋・呉服店以外に，消費者のニーズを正確に把握することであり，消費者へのデザインのＰＲでもあった。昭和55年の三越，56年の大丸，57年の西武の各デパートなどでの催し物に参加したのも，また57年3月に男物部門に挑戦して「裃小紋（カミシモコモン）」を発売したのも，同59年4月に白峰工場を廃止して白山工房展示館として見学者コースを設けたのも，その一端であった。

昭和58年度の牛首紬の現況は，業者4，織機約40台（うち出機2台），従業員60余名，生産高約4,100反である。

……牛首紬の工程……

〈製糸〉繭から糸を挽（ヒ）き出す工程で，「のべひき」と言う。

〈撚糸〉のべ枠から管に巻き取った糸は器械でよりをかけながら大枠に巻き取る。

〈練糸〉カセにした糸は石けんとソーダの液に入れて釜で煮ながら練りあげる。

〈糊付〉米粉が原料の糊を使い縦糸を固める。

〈カセ繰り〉縦糸と横糸をゼンマイ機にかけて小枠に巻き取る。

〈整経〉縦糸を巻き取った小枠を50個並べ8疋分の長さを1巻きにする。

〈巻取り〉織機の巻取り棒に巻き取る。

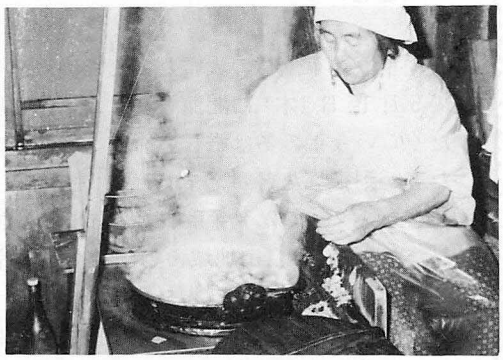
〈糸通し〉縦糸を上糸と下糸に分けて1本1本を針金製の綜（ヘ）穴に通す。

〈筬通し〉綜さしをした縦糸は上糸・下糸を1本ずつ一組にして筬（オサ）の目を通す。

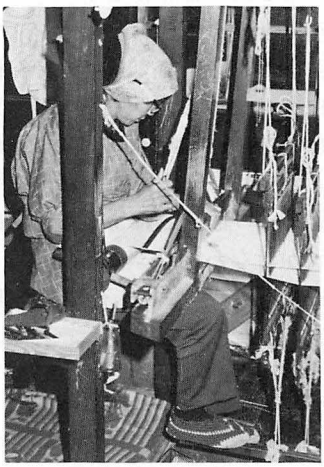
〈管巻き〉小枠に繰りあげてある横糸を織機にかけるために小さな管に巻き取る。

〈機織り〉織る。

〈処理〉検査・品等区分・仕上



のべひき（加藤機業場，昭和49年）



機織り（加藤機業場，昭和49年）

おわりに

10年前には後継者の確保が課題であったが，その後の企業努力によって克服されてきた。ところが，ダム建設後の白峰村は，ホテル・旅館・民宿など大小20軒の宿泊施設が出来，サービス業としての女子のパート的労働力の需要が著しく増大した。これは，女子労働力に大きく依存している紬織りにとっては，新たな課題となった。出機（デバタ）が減り，観光客などの見学者を受け入れたのも，一つの対応であった。今後，観光業とタイアップするなど，牛首紬が地場産業へと発展することを期待したいものである。

（注　参考文献等は拙稿『牛首紬』（昭和53年刊）を御参照下さい。）

（金沢錦丘高校）

たより

今年は3年ぶりの大雪だったために，当センター中宮展示館は，例年より半月以上遅れて5月17日（木）に開館しました。中宮展示館の周辺では，5月中旬でもなお残雪があったくらい今年の冬は厳しい冷えこみが続きました。山の動物たちにとっては，待ちに待った春が到来したといえます。

当センターでは今年度より「白山の自然教室」（年8回の予定）を開催することになりました。これは，白山地域の動植物や地質等をテーマに，毎回講師を決めて話をしてもらい，一般の人達に白山の自然を理解してもらうことを目的としています。第一回の自然教室は5月26日（土）に当センター水野研究普及課長を講師として、「冬をこしたニホンザル―カムリの群れ―」というテーマで開かれました。当日は県内各地から36名の参加がありました。第2回の自然教室は「イヌワシの行動圏」をテーマに6月30日に，また，第3回は「白山高山帯の植生とその復元」をテーマに7月30日に開催する予定です。なお，開催場所は毎回当センター本庁舎（吉野谷村木滑）の予定です。ふるって御参加下さい。

白山自然解説員の養成講座が、5月26日（土）～5月27日の2日間，当センター本庁舎と中宮展示館において開かれました。同解説員制度は、主に中宮展示館周辺と白山室堂において、一般観光客にその地域の自然を説明することを目的として，昭和57年度に石川県により設置されました。今回は，新規解説員（15名）の養成を目的として、各種講義、実習が行なわれ，全員修了しました。今年は45人の解説員が山頂部や登山道周辺，スーパー林道沿線で活動します。気軽に声をかけ利用してください。

目　　次

表紙　水没前の桑島……1

特集　山村の生活文化

ムツシ・アラシ（山作り）―考察……善財宗一郎……2

ムツシとナギハタ……千葉　徳爾……5

白山麓採訪記……小泉凡・大野一郎……8

牛　首　紬……西田谷　功……11

た　よ　り　……16

はくさん　第12巻　第1号（通巻51号）

発行日　1984年6月30日
発行所　石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920―23　Tel 07619―5―5321
印刷所　株式会社　橋本確文堂